

## 乳幼児期における母性的養育環境の相違と 発達に関する研究(6)

— 小児の初期環境における Separation, Deprivation の  
影響に関する研究 4 : 欧米先進国における保育研究に  
関する考察 —

研究第5部 網野武博

### I はじめに

本研究は、乳幼児期における Separation, Deprivation の経験が、その後の発達に及ぼす影響に関する文献的及び実証的研究の一環として行なわれているものである。今回の報告は、わが国における保育所入所児童の精神発達面についてのパイロット・スタディに引き続き、諸外国とくに欧米先進国における保育研究の動向を分析し、母親の就労が乳幼児の発達に及ぼす影響並びに、乳児保育、家庭的保育、集団保育が乳幼児の発達に及ぼす影響について考察したものである。

なお、文中の註の数字は、末尾文献のうち引用したものの No. である。

### II 母親の就労が乳幼児の発達に及ぼす影響

#### 1. 歴史的経緯

母親の就労がもたらす nonmaternal care の乳幼児の発達に及ぼす影響は、いわゆる母親との分離経験がその乳幼児に及ぼす影響のみならず、母親が働いているというファクターがその乳幼児に及ぼす影響という点からもまた、みていくことが必要である。

母親の就労が乳幼児に及ぼす影響、とりわけそれが乳幼児の発達に及ぼす短期的影響、長期的影響についての論究は、比較的古くからなされている。米国及び英国を中心にこれを見ていくと、Stoltz, L. M. によれば、既に1910年代、1920年代にかけて、経済学者、ソーシャル・ワーカーなどの研究を通じて、働く母親の養育は十分に なされているかどうかという点が検討されている<sup>11)</sup>。当時の研究によると、こどもが1歳未満のうちにその母親が就労すると、その乳幼児の死亡率は高くなるという指摘もみられ、この時期から1930年代にかけて、母親の就

労に関する否定的意見が強く出され、その結果婦人労働者の数は減少したという。しかし、その後の戦時の非常体制下、婦人労働者の数は増加していったが、この点の論及は殆んどなされなかったという<sup>49, 52)</sup>。

第2次世界大戦終了後も、米国における婦人労働者は増加を続け、1950年代には全婦人の30%に達しはじめた。この時期、母親の就労などによる分離の問題とともに、Hospitalism, Institutionalism などに代表される母性的養育の喪失 (maternal deprivation) の問題が次第に重視されるようになり、多くの論争が生じた。このような、母親が日中の短時間及至長時間にわたって子どもを養育できない状態に関する研究は、婦人労働が増加をみせる1950年代以降益々活発になっていった。

以下、母親が就労すると自体についての是非をめぐる論点と、母親の就労が子どもにどのような影響を及ぼすかの論点の2つについてみていくこととする。

#### 2. 母親の就労の是非

Etaugh, C は、米国における母親の就労と nonmaternal care に関する専門家の見解を、①有害である (否定的)、②有益である (肯定的)、③両面がある、この3つに分け、過去30年間の推移をみている<sup>38, 39)</sup>。彼は、1950年代から1960年代にかけては、「①有害である」とする見解が圧倒的多数を占めているが、1970年代に入る前後から母親が就労することや保育などの nonmaternal care に対して「②有益である」とする態度が次第に多くみられるようになってきたと述べている。<sup>38)</sup> 「①有害である」とする見解を示し、この面で強い影響を及ぼしてきた代表的な学者として、わが国でもその育児書で知られている Spock, B. J. をあげることができる。彼は "Baby and child care" の初版 (1946年)、第2版 (1967年) において、母親は家庭で育児に専念すべきであることを強調している。<sup>107, 108)</sup> また、同じくわが国でもよく知られている Salk, L. や Brazelton, (19)

T.B. も働く母親に対しては否定的である<sup>98, 20-23</sup>。さらに米国連邦政府児童局発行の“Infant Care”の初版(1963年)、第2版(1973年)も、子どもが3歳になるまでは、母親は家庭にいるべきであること、止むを得ず働かなければならない場合は、子どもは集団保育ではなく、個人的保育に預けられるべきであると主張している<sup>115, 116</sup>。この児童局の見解は、今日においても米国では3歳未満児の施設保育を原則として認めない根拠ともなっているものである。

このように「①有害である」が多数派であった中で、Gruenberg, S.M. の編さんする“The New Encyclopedia of Child Care and Guidance”は働く母親や保育に関して積極的、肯定的見解を示している<sup>45</sup>。この中で、育児の中で緊張や不満をもった母親とその子との有り余る接触よりも、満足な仕事をしている母親の数時間の接触の方がはるかに子どもには有効である、という考え方が示されており、母親が働くことと、家庭に残ることとの単なる二者択一を超えた問題提起を行っている。

ところで Etaugh, C. は、専門的文献のほか、さらに米国の代表的な婦人雑誌について、1956年から1976年までの20年間の記事を調べ、母親の就労と保育についての見解を分析している<sup>39</sup>。このような婦人雑誌を通してみると、既に1960年代半ばから「②有益である」とする意見への移行がみられ、とくに婦人雑誌のひとつ“Ladies Home Journal”は1966年に「ニューファミリーの生得的権利」というキャンペーンを通じ、Benjamin, L. や Gibson, G. らの6つの論文を掲載して、保育促進論をうちだしている。その中で単なる働く母親の子どものためばかりでなく、すべての向上しようとする母親の子どものために、よい保育がなされる必要があると述べている。さらに1970年代では婦人雑誌に掲載された15の論文中11が、母親や保育に積極的な態度を示したものであり、とくに働く母親のみならずすべての母親の子どもにとって保育経験が重要であるとする考え方が強調されてきている。

Etaugh, C. は雑誌関係の方が、専門家の見解よりも早い時期に nonmaternal care に共感を示し、肯定的な態度をとりだしているのは、世論や社会の関心に敏感に短期間のうちに反応を示すからであるとも述べている。この傾向は先きにふれた「①有害である」とした Salk, L. や Spoch, B.J. がその後「③両面がある」に次第に移行していった経過からもよみとることができる。たとえば Spoch, B.J. は、“child care”の第3版(1976年)になって、その考え方を一部修正することになった。

即ち、働く母親に対しても理解を示し、母親が働くことを問題として取り上げることがしなくなっている。そして父親・母親が共に働く権利を持ち、子どもを養育する義務を負うという考え方を表明している。しかし、3歳になるまでは両親が最良の養育者であること、集団保育は少くとも3歳までは代替的な養育としても望ましいものではないという基本的な見解についてはあらためて強調している<sup>110</sup>。

働く婦人の増加、とくに乳幼児をかかえた働く婦人の増加は、必然的に母親就労の是非論よりも、保育を受けなくてはならない児童にとって、どのような保育がより望ましいかという点に関心を向けさせていった。母親が働くことがどのようにその子に影響を及ぼすかについての論点をつぎにみていくこととする。

### 3. 働く母親の子どもに及ぼす影響

筆者らは、乳幼児期における deprivation に関する研究の動向と課題についてまとめ、実親からの分離を中心とする親的養育の deprivation に関する研究と論争の時期をつぎの4つの時期に分けた<sup>7)</sup>。

- 第1期—ホスピタリズムの提唱とその改善への試みの先駆期(今世紀初頭から第2次世界大戦まで)
- 第2期—ホスピタリズム研究と論争の開花期(おおむね1950年代)
- 第3期—ホスピタリズムの再検討期(おおむね1960年代)
- 第4期—母性的養育の喪失(maternal deprivation)の研究の分化、進展によるホスピタリズム研究の再評価期(おおむね1970年代)

働く母親の就労による母親と子どもの分離経験が、このような母性的養育の喪失の一環として考えられ、そのマイナスの影響が指摘されるようになったのは、上記の第2期にあたる。1950年代のはじめ Bowlby, J らによる世界保健機構(WHO)への研究報告<sup>17)</sup>を端緒として、乳幼児期における母親からの分離経験がその後の発達に及ぼす影響についてとくに精神分析学派の学者、研究者からマイナス面の指摘がつついた。その後母性的養育の喪失(maternal deprivation)の用語が定着しはじめ、たとえば Yarrow, L.J. はこれを①施設養育、②母親との分離、③複数による非連続的マザーリング、④歪曲されたマザーリングの4つに分類しているように<sup>132)</sup>、一般的に当初は施設における養育そのものが、ホスピタリズムと同義のものとさえ考えられ、母性的養育の喪失のひとつとして位置づけられていた。母親(実母)との分離経験も同じくそのひとつとして位置づけられていた。

母親との分離経験は日中の短時間の分離から、かなり長時間にわたる永続的な分離まで相当な広がりがある。しかし、先きにもふれた母親就労の否定論は、乳児期など早期における日中の分離経験そのものがマイナスの影響を及ぼすという根強い考え方に基づいている。Bowlby, J.らの報告以降しばらくの間「悪じき家庭であつても、良い施設より優れている」という言葉が流布したが、同じように母親が就労し、子どもが保育を受けることについても、このような言葉が用いられてきた。Kugelmass, N. I.は「最も悪じき実の母であつても、長期的に見れば最も望ましい保育の母よりも優れている。」と述べ<sup>60)</sup>、Brazelton, T. B.は「0歳児をもつ母親が就労した場合、2人の母親がいるということは1人の母親よりも悪じきことになると述べている<sup>20)</sup>。しかし、一方でYudkin, S.らはBowlby, J.らを批判し、母親が働くことが即母性的養育の喪失であるという点に疑問を示し、保育施設を利用することが、長期にわたる心理的、身体的影響を及ぼす証拠は何もないと述べている<sup>133)</sup>。このように母親が働いていることがその後の子どもの発達や行動上の問題と結びつくという点に関しては否定的な研究や見解も多くみられる。ただし、児童の年齢でみると、とくに学齢期以降の子どもについては、母親の就労のマイナスに及ぼす影響は少ないという見解は多いが、乳幼児期の子どもについてはさまざまな結論や見解に分かれ、母親の就労の影響はプラスであるともマイナスであるともいえないという見解が多い。

Rutter, M.は1970年代のはじめに、これらの研究を概括し、乳児期の子どもが母親が働きに出た場合にどくにマイナスの影響があるという確かなものはないが、その点での研究はまだ不十分であること、さらに、母親の像(実母・代理母親など)が常に変化して、その結果子どもがどの人物とも安定した関係を確立することができない場合にマイナスの影響があらわれる可能性が大きいことを指摘している<sup>93)</sup>。Rutter, M.はさらに1980年代のはじめにあらためてこれらの研究を概括し、母親が働くことの子どもへの影響に関する研究からは、保育が本質的に情緒的、社会的問題をもたらすということは通常はみられないので、子どもが幼ない時期には、ひとりの親(必ずしも母親ではなく、父親でもよい)が家に残って養育にあたるべきであるかどうかとの問いに対しては、それは必要だと断言することはできない。それならば通常はひとりの親が家に残って養育にあたる方が望ましいかどうかと問われれば、より答えにくくなると述べている<sup>96)</sup>。

過去の多くの研究は、その研究の対象や児童・母親・

家族の条件、社会・文化的条件が実に多様である。その中でほぼ一致した結論が示されないこと自体が当然のことであるともいえる。1960年代の研究で、Stolz, L. M.はこのように研究対象の比較や統制が不十分であることを指摘している<sup>111)</sup>。またYarrow, M. R.やHoffman, L. W.は、仕事が充実しており、積極的に仕事にかかわっている母親は、子どもの養育に関しても安定している場合が多い、との指摘をしている<sup>48, 130, 131)</sup>。1970年代の研究でEtaugh, C及びHoffman, L. W.は、母親の就労そのものがその子に及ぼす影響は有害であるとは言えないことをあらためて示し、影響する条件としての媒介変数をいくつかあげている<sup>38, 49)</sup>。これらをまとめるとおおむねつぎの7つの点である。

- ① 子どもの月齢・年齢、性別
- ② 社会・経済的地位
- ③ 人種・民族的背景
- ④ 家族の活動状況(不活動・怠惰など)
- ⑤ 働いている母親・父親の態度
- ⑥ 母親の雇用状況における特徴(フルタイム対パートタイム、規則的勤務対不規則的勤務、雇用期間)
- ⑦ 児童養育の種類・態様

Moore, T. W.は10数年にわたって働く母親とその子どもについて縦断的な研究をすすめたが、これらを通じ母親が就労している子どもをフォローアップしていく場合には、つぎの3つの点が肝要であることを指摘している<sup>67, 70)</sup>。

- ① 保育が開始された月・年齢
  - ② 保育の安定性
  - ③ 両親の家庭における子どもへの関わり方
- ②はむしろ保育条件にかかわり、③は両親の養育環境にかかわる。そして①はその両方にかかわっている。

先きにもふれたGruenberg, S. M.編の百科事典では、働く母親をもつ子どもにとっては母親が円滑な家庭生活を営むことが重要な要件であるとしている<sup>45)</sup>。同じくRutter, M.は、子どもにとって重要なことは、幸福で充たされた母親がいることであり、終日母親が家にいるということではないと述べ<sup>94)</sup>、また母親の勤労条件や経済的条件がよくなかったり、子どもを預かっている側の保育の質がよくなかったりすると、母親、子どもともに不満足なものどさせることがあると述べている<sup>96)</sup>。以上、働く母親の子どもに及ぼす影響についてふれてきたが、十分に考慮すべきことは、母親の就労の如何そのものよりも、子どもをとりまく母親の養育環境ひいては両親の養育環境の重要性が子どもの保育環境とともにあらためて問われている点である。

### Ⅲ 乳児期の保育

#### 1. 乳児期の母性的環境

1951年のWHOへの研究報告以来、Bowlby, J.らをはじめとする精神分析学者の母子関係理論は、世界的にきわめて大きな影響を及ぼした。その後 Bowlby, J. 自身もこれに対する批判に対し、その理論を修正しつつ、乳幼児期における基本的な母子関係の重要性について、比較行動学 (Ethology) の知見などを導入し、その考え方をさらに深めてきている<sup>18, 19)</sup>。彼はその基本的な母子関係を愛着 (attachment) の概念で説明している。

母親との愛着の形成と他の成人 (保育者、見知らぬ人など) との関係に関する研究は、Bowlby, J. と同じく比較行動学的進化論 (Ethological - Evolutionary Theory) の見解に立つ Ainsworth, M. D. S. らによつてすすめられてきた<sup>1-5)</sup>。これに類似した研究はその後非常に多くみられるようになった。彼らは、愛着とは人や動物が自分と他の特定の者との間に形成する情愛的結びつきであると定義し、それは両者を空間において固い結びつきをもたらす、時間を超えて永続するものであるとしている。また愛着行動とは、その接近や接触を促進する行動であり、人の乳幼児においては、接近、後追い、すがりつきや微笑・泣き・呼びかけなどの発信といった接近や接触要求行動を意味するとしている。

Bowlby, J. は、愛着の発達段階を次の4段階に分けている<sup>19)</sup>。

#### 愛着の発達段階 (Bowlby, J.)

- |   |
|---|
| 第1段階：人物の識別を伴わない定位と発信 (～生後8乃至12週)            |
| 第2段階：1人 (または数人) の識別された人物に対する定位と発信 (12週～6か月) |
| 第3段階：発信及び動作の手段による識別された人物への接近の維持 (6乃至7か月～2歳) |
| 第4段階：目標修正的協調性の形成 (3歳前後)                     |

彼は、このうちの第2段階を、乳児がある特定の人物をはっきり識別して最初の対人関係を確立する時期としてとらえ、また、第2段階では、子どもが愛着をもっているかどうか、その程度はどうかの問題は、愛着の定義によるが、第3段階では子どもは愛着をもっていると述べている。

このように特定の人物 (主に母親) を識別し、愛着を形成する段階における、その人物との分離経験乃至その

人物の喪失が、その後の精神発達ひいては人格の発達にどのような影響を及ぼすかが論議の焦点となる。

Blehar, M. C. は、このような愛着が比較行動学的進化論に基づいて遺伝的に解発されていくという Bowlby, J. Ainsworth M. D. S. らの説を重視して、「この愛着理論は、現代の社会が愛着関係を形成し維持する遺伝的な基本傾向に逆らわずに如何に柔軟に児童養育を整えることができるのだろうかという疑問を呈示しているのだ」と述べ、さらに「保育への制限や保留の意識は、保育がもっている複数マザーリングとか母 (愛着の人物像) との分離といった要素が母親との正常な愛着の発達を妨げたり、既に確立されたそのような関係を損うのではないかという危惧から生じている」と述べている<sup>15)</sup>。

乳児期における母親との連続的な安定した関係の意義が、Blehar, M. C. の指摘するこの問題点において乳児期の保育に関する理念や意識、そして一般的常識と常に分かち難く結びつき、多年の結着をみない論争や実践的試みが繰り返されてきたといえよう。

多くの研究の焦点は、愛着形成の重要な時期にある乳児期において、母親とのいかなる分離もマイナスといえるのか、また、いつ頃からならばマイナスといえなくなるのか、という点である。

過去の研究のそれぞれの条件・対象・方法を捨象して結論のみを引用することは必ずしも妥当ではないが、ここでは、乳児期からの保育が発達に及ぼす影響について比較的对立した見解が示されていることを以下に指摘することとなる。

#### 2. 乳児保育が発達に及ぼす影響

Bowlby, J. は、1960年代後半から70年代のはじめにかけてなされた母子分離に関する研究を概観し、いくつかの結論を出すことができるとして、つぎのような点を指摘している<sup>19)</sup>。即ち、無理のない、多少とも見慣れない事態において、家庭で育てられた11か月から36か月の子どもたちは、母親の不在に直ちに気づき、関心を示すのが普通である。その関心の程度にはかなりの差異がある。2歳児は1歳児とほぼ同様にそのような事態で混乱を示しやすい。そしてどちらの年齢においても、子どもは母親や未知の人と再び一緒になっても、その混乱は急速には消えない。3歳児においては、その混乱の度合は低く、母親がすぐ戻ることにより理解するようになる。母親や未知の人と再び一緒になると、子どもは急速に回復する。4歳児は事態による影響をほとんど受けない場合もあるし、母親の明らかに独断的な行動によって非常に苦しむかのどちらかである、と述べている。

一般的、標準的には母との分離への反抗は3歳頃に非

常に弱まり、母への接近を求める行為は4歳頃までに消えていくと考えられる結果が多い。このことは、乳幼児期は言うまでもなく、2歳頃までは保育経験よりも母に養育される経験が必要であるとの結論を導く根拠となっている。早期からの保育に関してのマイナスについては、Ainsworth, M. D. S. のほか Blehar, M. C. らも早期から保育を受けた幼児と、生後2、3年母親と家庭で過ごした幼児と比較すると、前者の方が母との相互作用や、再会後の母との接近が少ない傾向がみられ、後者の方が良好な愛着行動を示したと報告し<sup>14)</sup>、Schwartz, P. は、生後9か月までに保育を受けた幼児と、保育経験のない幼児（いずれも1歳半時）を比較すると、母と分離した後の再会の場面では、母からの回避や拒否がみられたのは全日保育を受けてきた幼児であり、毎日の分離の長さが、母親への愛着の強さの重要な決定因となっているのではないかと報告している<sup>103)</sup>。Cochran, M. M. は、乳児期、幼児早期から施設保育を受けた幼児よりも家庭的保育を受けた幼児、家庭で養育された幼児の方が成人（母親、保育ママ、保母）との相互作用が活発であり、探索行動も多くみられ、他児との遊びのみが施設保育児に多くみられたとし、特定の人との愛着・分離の程度、養育・保育環境の相違をその背景としてあげている<sup>32)</sup>。Vaughn, B. E. らはさらに、経済的な事情から家庭外の保育を受けている幼児について、見知らぬ人や物の場面における愛着の状況について実験し、生後12か月以前から保育を受けた幼児では、12か月の時点では47%が、18か月の時点では41%が愛着における不安回避を示したが、12か月以降から保育を受けた幼児では、不安回避の愛着はこれ程にはみられなかったとし、このことは、早期の分離が母子間の物理的・心理的親近性を形成する妨げとなることを示している。と述べている<sup>119)</sup>。

このほか、乳児期から保育を受けている幼児の性格・行動傾向について、Schwarz, J. C. らは、2歳あるいはそれ以降になってから保育を受けた幼児よりも攻撃的で、運動が活発であり、成人との協調性が低いと指摘している<sup>102)</sup>。

しかし、その前年の Schwarz, J. C. らの研究では、生後5か月から22か月までの早期に保育を受けた幼児と、24か月から47か月になって保育を受けた幼児と比較すると、早期保育児の方が情緒的に不安定であるという予測に反して、情愛的関係、社会的相互作用の面でむしろ後期からの保育児よりも正の反応がみられたとしている<sup>101)</sup>。

この報告のように、乳児期など早期から保育経験をもつ幼児の発達について、マイナス面があまり指摘されず、またプラス面が指摘されている研究のいくつかをつぎに

あげてみたい。Caldwell, B. B. らは乳児期から施設保育を受けた幼児と家庭養育児（ともに2歳半）の母と子の愛着の状況について比較し、両者に何らの相違がみられなかった、しかし、愛着の強さと子どもの発達のレベルとの間に、また愛着の強さと発達への刺激や支援との間にみられる連関は家庭養育児の方が強かった、と指摘した<sup>29)</sup>。Spelke, E. ら、また Maccoby, E. E. らはキブツ保育児を含めた研究の結果、早期からの保育経験は愛着の形成に支障となっていないと述べている<sup>64, 106)</sup>。また Kearsley, R. B. らは、3.5か月時から20か月時までの2か月毎に保育児と家庭養育児の両群に母子分離を体験させ、両者に全く相違がみられないことを示し、「乳児期は家庭で養育すべき」という神話に対抗して、Howell, M. C. の主張している「我々の知見は、(この時期からの保育が) 何の悪い影響も及ぼさないことだ」という言葉を支持している<sup>50, 51, 59)</sup>。

このように、両者に相違はみられないとする報告はほかにも比較的多い<sup>11, 25, 36, 63, 80, 81, 84, 100)</sup>。

さらに母親と保育者である代理母親への愛着を比較した研究がある。Ricciuti, H. N. ら、Farran, D. C. らは、保育児は母親への愛着の発達と併行させて代理保育者への愛着を形成させていくこと、しかし母親により以上の直接的な愛着行動を示したことを指摘している<sup>40, 85)</sup>。

わが国の研究をみても同様にその結論や議論は両方向に、まだどちらとも言えないという見解に分かれている。

乳児保育に関する研究は、既にふれてきた母親の就労が乳幼児に及ぼす影響に関する研究と同じく、その条件変数が多様であることも指摘しなければならないが、共通に重要な点は、つぎの点であろう。

- ① 乳児期における特定の人（母親）との愛着の形成が保育によって損なわれることの有無とその程度
- ② 乳児期等早期からの保育における保育者との愛着、保育環境のプラス面、マイナス面の影響

保育者を含む保育環境の影響については、以下の家庭的保育、集団保育の項でさらに深く検討してみたい。乳児保育が、基本的には保護的養育の側面を重視しなければならない点は言うまでもない。また、乳児個々の個性・特性やニーズを重視した個別保育が必要であり、Provence, S. は施設における乳児保育は、全体的な乳児の発達を促進するための総合的プランをたてることと同時に、この個別保育が不可欠のものであることを説いている<sup>77)</sup>。

そして、そのかわりの中での特定の人（保母、代理母親）との相互作用の程度や質が問われることとなる。上述の多くの研究では、この点でのアプローチはまだ不

十分のように思われた。

一方乳児保育において、これと等しくあるいはそれ以上に重要なことは、母親と子どもとの関係である。多くの保育がそうであるように、母親との日中のある時間の分離がそれ自体著しいマイナスの影響を及ぼすとの考え方に疑問を呈する研究が多くみられてきていることは、既に紹介したとおりである。むしろ重要なことは、安定した母子関係の中での比較行動学的進化論で言う本質的な愛着の形成は、保育のみによって損われると考えるよりも、母子関係の質によっていると考える方が妥当である。確固とした母子間の愛着は、乳児保育による保育者と子どもとの愛着を超えるものであるのが自然である。

それでは、母親による養育は、いかなる乳児保育よりも望ましいのであろうか。先きに引用した Kugelmass のようにいかに悪しき母親でも、保育者より優れているといえるのであろうか。今日このような考え方はむしろ少数であるといつてよい。乳児期の母子関係の重要性を強く指摘している Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Vaughn, B. E. らも、家庭養育それ自体が、愛着形成を保障するものではないと述べている<sup>5, 15, 119</sup>。

1960年代のはじめ、Prugh, D. G. らは家庭における母親乃至両親による歪められた、不十分な養育を隠された deprivation であるとして、masked deprivation と呼称した<sup>79</sup>。家庭外における保育や施設養護が、このような deprivation による発達・行動上の問題を改善、修復する役割をもっているという認識は重要なことである。乳児保育を通じて、母子関係の基盤や愛着の形成を確かなものにさせる働きかけや援助は、乳児の保育を通じた発達の促進・援助とともに欠かせない視点であり、役割である。

### 3. 乳児保育の動向

欧米諸国の中には乳児期の保育を可能な限り避けようとする国もある。米国では、近年の法改正により3歳未満の乳幼児の保育も制度として考えるようになったが、乳児保育に対しては今日も否定的な側面が強い。ハンガリー、ブルガリアにおいては家庭養育を保障する育児休業制度などを通じて、2歳までは母親が家庭で育児に専心することを重視している<sup>58</sup>。育児休業を普及させている国は、多かれ少なかれ乳児保育よりも家庭で養育することを考慮していることがわかる。比較的この面で歴史の長いスウェーデン、ソ連ではこの制度が乳児保育のニーズを増大させていない背景のひとつとなっている。

乳児保育の国際的な動向をみると、集団保育乃至施設保育よりも家庭的保育によって行われている例が多い。乳児保育を集団保育の一環としてすすめている典型とし

てソビエト及びイスラエルのキブツがある。これらについては既に紹介、論説など数多い。

キブツにおいても、近年は親との接触の機会、母子関係などを重視した保育が行われるようになってきている。以下に欧米諸国の例としてソ連についてふれる。

ソ連の近年の動向をみると、育児休業制の採用、家庭意識の変遷などにより、今日では乳児保育のウエイトはむしろ減少しているようである。とくにアクサリナ ( Аксарина, Н ) とコーガン ( Коган, Г. ) の両者による0歳児保育是非論争は、生後2か月以降の集団保育のメリットを主張するアクサリナと、1歳半までは母親のもとで家庭で養育されるべきだとするコーガンの主張が並行線をたどったわけであらうが<sup>6, 56</sup>、むしろ近年では、集団保育か家庭養育かの択一論争を超え、母親が家庭で自から育てるか、働きに出てその間保育施設に預けるかを主体的に決定できる条件が整ってきているようである。これらの経緯については、川野辺敏編「ソビエト・東欧」(岡田正章・川野辺敏監修「世界の幼児教育」3)に詳しい<sup>58</sup>。なお、ソ連の0歳児保育については、守屋が1978年に日本で行なわれた日ソ教育シンポジウムにおいて、ソ連のパネラーらが、つぎのような趣旨の発言をしていたことを紹介している<sup>71</sup>。即ちゼロ歳児の24時間保育は、育児休業制が確立され、母乳授乳保障からも、おこなっていない。通園のゼロ歳時保育も少なくなっており、2歳以後のものが多くなっている。しかも、3歳までの保育園そのものも全国的に就園率は低下している。乳幼児の統一保育施設としての「保育・幼稚園」でも同様で、3歳以上の幼稚園段階の就園率は高いが、これ以下の年齢児は低く、また「週託」などの制度も、3歳以上で、特殊な職業の親の子どもに限られている、というものであった。

## IV 家庭的保育

### 1. 家庭的保育の意義

母親以外の人による日中の保育が家庭的保育であることが望ましいと考える人々の根拠として、とくにつぎの点をあげることができる。即ち、乳幼児期における maternal care の重要性の認識のもとに、仮りに nonmaternal care にならざるを得ない状況にあっても、それに近い母親の人物あるいは代理母親によって可能な限り maternal care を損わないようにすることが必要であるとする考え方である。また、乳幼児期における対人関係は、子ども同志よりも両親など特定の人物との深い関係がとくに重要であるとする考え方も、その根

拠となつてゐる場合がある。

先に引用した Kugelmass, N. I. や Brazelton, T. B. など母親至上主義の見解は、家庭的保育すらも許容し難いが、止むを得ず保育を必要とするならば、このような態様の方が望ましいとする。

Rutter, M. は、3歳未満児では、「よく知っている個人による養育」という家庭的状況で保育を受けている場合は、その児童はより幸福で満ち足りた状態にあるといえる、と述べている<sup>96)</sup>；このような表現は上述の考え方を説明する最も常識的、一般的表現ではないかと考えられる。

家庭的保育重視の考え方に対する疑問、反論は必然的に集団保育を指向する場合が多いが、単に集団保育との対比のみならず、家庭的保育のポイントである母親以外の特定の人物との関係について、とくに同一化、愛着関係の形成などに関して深く検討しなければならぬ問題がある。そして、この問題をはじめ家庭的保育に関する研究領域は、まだ十分に踏み入れられていないという観が強い。

家庭的保育、集団的保育とを問わず保育経験をもつ乳幼児の母親との情緒的関係や愛着については、既にふれているので、それ以外の研究について、とくに集団保育との比較を中心に以下概観する。

## 2. 家庭的保育が発達に及ぼす影響

家庭的保育について論じた研究は欧米諸国においても決して多くない。諸条件をある程度規定できる集団保育と家庭養育の両者に比べてその双れとも異なり、またその双れとも共通部分を有する家庭的保育について、研究者が関心をもちなかつた背景も理解できなくはない。

まず米国についてみてみよう。Sale, J. S. は、保育に占める家庭保育の割合の高さを指摘し、家庭的保育を今後より改善・向上するためのプロジェクトを試み、その成果についてふれている<sup>97)</sup>。生後6か月から11歳にまでわたるこの地域家庭保育プロジェクトでは、さまざまな保育者による情緒的・教育的・社会的プログラムを包括した保育を試みている。そして保育ママの役割が収容施設の保母ども、また単なるベビーシッター(子守り)ともちがう職務をもたなければならぬ重要性を指摘している。このプロジェクトにも加つたことがあり、同じように家庭的保育の重要性を強調した Prescott, E. A. は、家庭児や家庭的保育児の方が、保育センターの集団保育児よりも成人との相互作用がより活発で、頻繁であると報告している<sup>76)</sup>。しかし、相互作用については、Rubenstein, J. L. らは家庭的保育児と保育センターの集団保育児の間では成人との相互作用に何の相違もみられなかつたと

し、しかも集団保育児と成人との比は3:1以上であったが、成人との遊びや目標をもつた遊びはこれらの保育児に多くみられ、家庭的保育の方に成人の制限や懲戒が多くみられた、と報告している<sup>89)</sup>。

また、近年の研究では、Innes, R. B. らは家庭的保育児と集団保育児では、成人との相互作用や社会的参加について前者の方がより良い結果がみられ、また成人との相互関係では、家庭的保育児に個人的、感情的側面はあまりみられなかつたと報告している<sup>53)</sup>。Howes, C. らは、1歳の施設保育児と家庭保育児を比較し、両者にグループの規模、月齢、年齢の構成、利用できる設備などに相違があるにもかかわらず、両者の社会的相互作用には相違がみられず、類似したものであつたと述べている<sup>52)</sup>。

一方、知的な発達とくに認知的発達についての比較研究は、Bronfenbrenner, U. の家庭児と保育児の研究でよく知られている<sup>24)</sup>。彼は乳幼児期からの知的発達に家庭的働きかけが重要であることを指摘しているが、これを家庭的保育の中でその効果をみようとしたものに Goodman, N. らの研究がある<sup>43)</sup>。彼らは、保育ママやその他のスタッフの教育的かがわりが、2歳半乃至4歳児の認知的発達にどのような影響を及ぼすかについて研究し、保育専門家による集団保育をうけた幼児よりも教育的機能を併せもつた家庭的保育をうけた幼児の方が常に認知発達が促されたとしてゐる。

このほか Wandersman, E. P. は、家庭的保育のあり方を生態学的にとらえ、保育児・保育者、状況設定の特徴について検討を加えている<sup>122)</sup>。

以上みてきたように、米国においては保育に占める割合の高い家庭的保育とその影響に関する Sale, J. S. らのような積極的、本格的なプロジェクト研究はまだ少ないようにみうけられる。

西ドイツにおいて10年程前から制度化されている昼間里親によって保育された乳幼児の発達状況に関する Nierman, M. M. らの研究では、昼間里親によって保育された児童は、職業を持たない母親によって養育されている児童と比較しても優るとも劣らない発達状況を示していると報告されている<sup>55)</sup>。

一方、家庭的保育のモデルとして長い歴史をもつチャイルド・マインダー制をとつてゐる英国についてはどうであろうか。

3. 英国のチャイルド・マインダー  
チャイルド・マインディング(預り保育)はベビーシッター(子守り)とともに歴史は古く、Van der Eyken, W. は聖書と同じ程に古い歴史をもつてゐると述べている<sup>118)</sup>。1948年に「保育所及びチャイルド・

マインダー法」が制定されて始めて法的に認められたチャイルド・マインダーは、1968年の「修正保健サービス・公衆衛生法」によって、チャイルド・マインダーの登録制が定められ、また、この年の政府の保育方針により、チャイルド・マインダーは全日保育の重要な資源として位置づけられるようになっていく。

法律によれば、親族以外の子どもを1日2時間以上自宅に預かる場合にはすべて、チャイルド・マインダーとして登録しなければならないことになっている。しかしその要件は、健康であること、人格的に問題のないこと、といった程度である。またチャイルド・マインダーになってチェックをうける内容は、保健医療機関からトイレ、洗濯場を監査され、消防局から防災設備の点検をうける、といった程度である。したがって登録を意図すれば容易なものであるだけに、逆に未登録のまま他人の子どもを預かり保育している未登録チャイルド・マインダーの数はきわめて多いと推定されている。登録者の3倍以上の非登録チャイルド・マインダーがあり、これらの人によって保育されている子どもの数は、制度上の保育を受けている子どもをはるかに超えたものだという事は、関係者の間ではごく当然のこととして受けとめられているようである。

van der Eyken, W. は、ロンドンの登録チャイルド・マインダーの典型は、1週間に7乃至10ポンドの保育料(1977年時点)を親から受けとり、午前8時から午後6時頃までの間その子を預り、食事を与え、散歩に連れ出し、おもちゃを買い与え、その他こまごまとした世話をし、と表現している。

彼はチャイルド・マインダーに育てられている子どもについて、ロンドン地区の39人の登録チャイルド・マインダーに育てられている40人の2歳児に関する Coram, T. の研究報告からつぎのように引用している。「これらの2歳児の4分の1の子ども達は3回以上にわたって別のマインダーに移されていた。制度上は自分の子どもを含めて3人までの養育が定められているにもかかわらず、それ以上の数の子どもを養育していた。ひとりで10人、9人、7人、6人というマインダーもみられた。このことは、地方政府の黙認により、必要以上に多くの子どもたちを受け入れている例がしばしばみられることを示唆している。このようなことは、絶望しきった母親が、戸口からあきらめて帰ってしまうということが出来ないということ、またマインディングの報酬が非常に安いので他の保育の資源で埋め合せることなど出来ないということを十分に知っているチャイルド・マインダーを批判して言っているのではない。

多くの子どもたちは、言語の理解・表出の両面について調査した Reynell 言語発達尺度では平均以下の値を示した。この結果は、チャイルド・マインダーに保育されていることが、この良くない結果の原因となっているということではなく、むしろチャイルド・マインダーとの相互作用が状況を改善していないということ、チャイルド・マインダーが言語発達を評価する何らの方法も持ちあわせていないということである。研究の結果からは、子どもたちは、チャイルド・マインダーを代理母親のごとくに見做して行動してはいない。

チャイルド・マインダーの家庭にいる時と、母と家庭にいる時の子どもの状態を比較すると、家庭にいる時は子どもはあまり支配を受けず、より注目を求め、見知らぬ人がいてもより幸せそうに見える。チャイルド・マインダーは、あまり「代理母親」や「受着の人物像」になるような役割をとろうとしていない。彼らは、あまりに子どもと親密な関係を持つと、母親の方が嫉妬心や罪悪心を持つなどして、母親との関係が難しくなるので、自からそのような目的で動こうとしないと言っている。現実には、如何にすぐれたチャイルド・マインダーであっても、養育の一般的レベルは不満足であろうし、地方政府の登録も名ばかりのものであろう。研究対象となったチャイルド・マインダーの5分の1の人は6か月以上ソーシャル・ワーカーと会っていないし、4分の3の子どもは保健専門家の訪問を受けていなかった。この不満足な状態はマインディングにおいては本来のものだろうか、それともふさわしいスーパービジョンや現任訓練・援助があればその質は向上するのだろうか。勿い子どもたちを育てることに意欲をもたないマインダーも数多いということは疑われないが、正しく援助を受け刺激を受けることによって、自分の仕事をより向上させ、意欲を持つとうとする有能なマインダーも多いであろうことを疑わない。」

このようなチャイルド・マインダーの実情は、家庭的保育の理想から遠い部分を少なからず擁していることを卒直に示している。しかも英国における階級差やさまざまな国籍・民族で構成されている社会の基盤が、劣悪ともいえる多くの非登録のチャイルド・マインダーを生みだしていることも van der Eyken, W. は指摘している。

Rutter, M もまた、チャイルド・マインダーによる“Pillar to post”一次から次へとマインダーが代わる手渡し保育によるマイナスの影響に言及している。即ち低いレベルの、刺激の不足した環境、中には愛情を十分与えられずに保育されている児童が、注目もされない環境と同じような手渡し保育の不安定な環境がもたらす



悪影響を指摘している<sup>94)</sup>。Mayall, B.らは、「悲しそうな、積極性のない子どもの表情、不安で悩み多い母親の表情、そして子どものニーズや母親の不満に鈍感な、固く押しつけがましいマインダーの姿。これらはマインダーの恨みでもある。」という表現を用いるなど<sup>66)</sup>、チャイルド・マインダーに関するマイナスの指摘は比較的多くみられ、この面のみをみると、その指摘はわが国において一時とりあげられたベビー・ホテル問題を彷彿させるものがある。

近年英国では、Bowlby, J.の指摘にとどまることなく、家庭外における乳幼児保育に専門家がより関心をもつことの必要性が指摘されるようになった。先きのvan der Eyken, W.のほか1980年代に入り、Bryant, B.らはチャイルド・マインダーに関心を示し、果たしてチャイルド・マインディングは、家庭で母親のもとで育てられている状況と最も類似しているという理由で最も望ましい方法であるといえるのだろうか。母親の人物とただ一緒にいれば良いのであろうか、と述べている<sup>26)</sup>。Raven, M.は、我々はチャイルド・マインディングについて今日も余り知ってはいない、もっとよく知り、そしてもっとより良い方向を考えなくてはならないと述べている<sup>83)</sup>。

このような私的な保育の劣悪性を克服するためにも公的な保育施設の普及を強く望む専門家もみられる。Tizard, J.らは、家庭的保育と施設保育の双方について望ましい方向、あり方についてふれている<sup>30, 113)</sup>。

以上のように、保育の中でも家庭的保育に関する研究や考察は、これまでに決して多くはない。わが国の動向をみても同じことが言えるのではないだろうか。

一般論・常識論として望ましいとされている母性的養育に近い家庭的保育の本質や乳幼児に及ぼす影響について、さらに深く検討することによって、保育の態様として大きな位置を占める家庭的保育の功罪や望ましいあり方を考えることができるのではないかと思われる。

## V 集団保育

### 1. 早期の集団保育

3歳未満とくに乳幼児期においては、可能な限り家庭で養育することが望ましい、保育が必要であるならば家庭的保育が望ましい、とする考え方は、世論としても、また学問的に必ずしも過去における程十分な説得力を持つに至らなくなってきていることは、これまでに概観してきたとおりである。しかしその一方、乳幼児期からの集団保育に対しては批判的・消極的見解を示唆する報告は今

日においても少なくない。欧米諸国においては、0歳児の集団保育は制度的にも、また実態からも優位におかれているとはいえない。実態からみると、スウェーデンにおいても、0歳児の集団保育が積極的に行なわれている傾向はみられない。いずれにしても、乳幼児期においては、家庭的と集団とを問わず保育環境がその子どもの1日を支配している状況というものは、積極的にベターであるとは考えられないという見解は妥当であるように思われる。

乳幼児期及び幼児早期の集団保育における配慮は、まず、母親との基本的人間関係の確立の問題があり、次に他の成人や他の乳幼児、仲間集団との相互作用の問題、そして第3に、発達課題の遂行や解決の問題の三点がとくに重要な点とであり、とりわけ第一の点がその焦点となる。

母親との基本的人間関係や愛着の問題については、既にふれてきた。これらの点を要約してKagan, J.らの表現を引用すれば、「7か月から18か月児の期間では、愛着が形成され始める以前か、完全に確立された後のどちらかに保育を始めた方が多分望ましいだろう<sup>57)</sup>」ということがいえるであろう。これには個々の乳幼児の個人差とともに、家族的背景や母子関係の特徴の相違があり、一概に6か月以前か、あるいは12か月以降というような表現をすることは不可能である。Kagan, J.らはまた2歳児頃迄は、保育環境における成人の存在、役割の大きさを指摘し、1人の保育者が3人以上の子どもを保育することはできないと述べている。また、Stallings, J.らは、1歳児は、乳児とも2歳以上の児とも混合したグループニングをとるべきではないとの見解を示している<sup>73)</sup>。即ち、保育者は乳児には積極的にかかわりを持つ役割があり、また2歳以上の幼児は保育者に積極的に接近しようとするため、1歳児は保育者との関係で十分な接触がはかれないおそれがあるからである。

そして2歳頃から始まるnonmaternal care(母親以外の者による養育)は、母親への愛着には損傷をもたらさないという見解は多い<sup>36, 40, 41, 72, 85)</sup>。

早期の集団保育は、わが国ではいわゆる「乳児保育」として位置づけられており、公的保育における保育方針や保育内容によってはスウェーデンにおける保育方針・内容とともに高いレベルで行なわれていると言ってもよい。

しかし、これらの早期からの保育の及ぼす影響(プラス効果・マイナス効果など)に関する研究は、欧米諸国、わが国ともに必ずしも豊富に行われてはいない。

また、保育の効果は短期的なもの、長期的なものがあり、フォローアップ研究や縦断的研究も不可欠であるが、

これらについても必ずしも十分に行われていない。

欧米諸国におけるこれまでの研究の中で、保育時から青年時代にまでわたる縦断的研究としては、Moore, T. W. のそれがある<sup>67-70)</sup>。彼によれば、0歳から2歳までの早期から保育を受けた乳幼児は、保育環境が安定していた場合と不安定であった場合を比較すると、7,8歳頃にその差が明らかになったとしている。即ち不安定であった場合は、子どもは感情を乱しやすく、情緒的に不安定であり、依存性が高く、神経質で不安を示す、といった傾向がみられた。しかし、その場合、母親の方も不安定な性格傾向を持っている人が多かったと報告されている。また、保育環境が安定していても、7歳頃になって、母親の関心をより強く求めようとする傾向があり、親密な母子関係の形成がうまくなされなかった事例もみられた。さらに、Moore, T. W. は3歳以降に保育を経験した幼児では、安定した保育環境のもとでは、その後学童期になっても情緒的な問題はとくにみられなかった、としている。

この結果をみると、早期からの保育は、発達にマイナスの影響をもたらすことを示唆しているようにも思えるが、しかし、その背景として、保育者がしばしば交替する、保育条件が安定していないなど、保育環境の安定性や、母親の性格・行動傾向などがとくに早期からの保育の場合影響を及ぼしやすいことを示唆している。

## 2. 集団保育が発達に及ぼす影響

集団保育が発達に及ぼす影響を考えると、集団保育そのものを単一の因子として比較することは、決して適切な結果をもたらすとはいえない。保育にかかわる因子としては、次のようなことがかかっている。

- ① 保育者と保育をうける乳幼児との数比
- ② 保育者の安定性と連続性
- ③ 保育者の質
- ④ 提供される保育の内容
- ⑤ 保育開始時の月齢・年齢
- ⑥ 保育経験の期間
- ⑦ 家族環境と安定性
- ⑧ 保育経験前からの母子関係の状況
- ⑨ 保育以外の日常生活経験
- ⑩ 乳幼児の特性(性・出生順・気質・行動傾向)

たとえば、先きの Moore, T. W. の研究の結果は、①～⑤の保育環境ならびにとくに⑦、⑧などの養育環境に、より相違がみられることを示している。

Belsky, J. らは、1970年代後半までの保育の効果に関する研究を概観し、それらは、比較的良質の保育が行われているところでの研究が多く、このような良質の集団

保育を受けた乳幼児の場合には、知的発達に及ぼす影響については、有益とも有害ともいえないこと、母親との愛着など情緒的な結びつきを損なうものではないこと、仲間との相互関係を積極的、消極的の両方向に増加させること、などが指摘できるとしている<sup>12)</sup>。

何が良質な保育かまたは、決して簡単に決められない場合もある。たとえば良質な保育のひとつの要件として①の保育者と保育児との比が小さいことがあげられよう。しかし、実際にはそれが②や③と結びついて考えられなければならない。たとえば Cumings, F. の研究の対象とした保育施設では、保育者と保育児の比は1:4という良好なものであるが、実際の保育ではいわゆる個別保育制はとられず、1グループ15人乃至20人の幼児を保育者が4人乃至5人のグループで担当している<sup>35)</sup>。集団保育の中でも可能な限り個別保育を重視するというのが良い保育であるとするのか、グループの中に可能な限り多くの保育者が存在することが、良い保育であるとするのか、議論の分かれるところである。また、①、⑧の点でみると、Blehar, M. C. のように家庭や母子関係が安定していれば、集団保育における発達効果が、家庭養育よりも良いということは殆んど考えられないとする研究者もいるが<sup>15)</sup>、家庭や母子関係の安定性が保育の効果を高めるとの考えが多いことは既にふれてきたとおりである。

また、数多くの因子の中で⑩の乳幼児の特性のうち、心理的な特性とともに、性や出生順など生物学的・社会文化的特性が考察の対象となっている研究も多い。性差でみると、保育経験そのものが及ぼす影響は、男児の方が受けやすいという報告の方が多い。先きの Moore, T. W. の研究では、保育を経験した乳幼児が15歳になった時点で調査したところ、男児の方が両親と対立的であり、罪意識などを無視する傾向がみられたが、女児ではその傾向があまりみられず、家庭児と相違はみられなかったとしている<sup>70)</sup>。

Moskowitz, D. S. らは、保育を受けている男児の方が、母親がいる場面では安定し、独自の行動ができるが、母親と分離すると不安な反応を示し、女児はそれ程に影響を受けていない、と報告し<sup>72)</sup>、Portnoy, F. らも保育を受けている男児の方が、女児よりも、見知らぬ人の場面で泣き、反抗、他人からの回避などがより多くみられたとしている<sup>75)</sup>。また、Brookhart, J. らは、保育女児の方が見知らぬ成人とも接触を保とうとする、と述べた<sup>25)</sup>のに対し、Cornelius, S. W. らは、保育男児の方が依存性が少なく、見知らぬ成人とも接触すると報告しており<sup>33)</sup>、Vliestra, A. G. は、保育男児の方が活動性が

高いとしている<sup>120)</sup>。さらに性差が見られないという報告もある。

出生順位では、第1子の方が第2子以降の子どもよりも不安を示すなど、保育の影響を受けやすいと報告しているものが多いが、これらを分析して、Rutter, M.は、むしろ母親の第1子と第2子以降の子どもとの接触や相互作用の傾向の相違が強く影響しているのではないかと指摘している<sup>96)</sup>。

さらに知的発達や、性格・行動傾向では、Belsky, J.らの指摘するごとく、集団保育が知能の発達にどのような効果をもたらしているかは明らかではないという研究が多い<sup>32, 61, 65, 70, 102)</sup>。Macrae, J. W.らは、むしろ早期から集団保育を受けた方が問題解決や抽象能力のレベルは高く、計画性が豊かである場合がみられた例を報告している<sup>65)</sup>。

これらの点では保育環境の量や質とかかわりが強いことが当然予測される場所である。このほか、米国におけるプロジェクト・ヘッド・スタート、フォロー・スルー・プロジェクトなど、インテンシブな保育・教育プログラムの効果については、今後さらにその経過をみる必要がある。また、Golden, M.らによる大規模な保育計画の実践報告など<sup>42)</sup>、同じように社会・文化的、経済的ハンディキャップを持つ幼児に対する保育が知的発達の大きな刺激となっている例は米国においていくつかみられる。

保育経験のある乳幼児の性格・行動傾向については、Rubenstein, J. L.は、家庭児に比較して保育児の方が母親への従順性が低く、不安やかんしゃくをおこす傾向、その他行動問題がみられる傾向があったと報告している<sup>91)</sup>。Schwartz, J. C.らは2歳以前に入所した保育児は、それ以降に入所した保育児よりも攻撃性が高く、成人との協調性が低かったとし、またその前年の報告では生後22か月までに保育を受けた幼児は、24か月以降に保育を受けた幼児よりも情愛的関係、社会的相互作用においてより反応が高かったと報告している<sup>102)</sup>。

このように一貫した傾向は認められないものの、仲間との相互作用、対人関係では、保育児の方が家庭児よりも相互交渉への抵抗が少ないという結果が殆んどである。またパート保育よりも全日保育を受けている幼児の方が、積極的に仲間と相互関係をもち、活発に活動する傾向がみられることをVliestra, A. G.は報告している<sup>120)</sup>。O'Connell, I. C.らは、経済・社会的にハンディキャップをもつ幼児では、保育児の方が家庭児よりも主導的に仲間との交渉をもち、中産階級の幼児よりも意志の表現、相互交渉がともに促進されたと報告している<sup>74)</sup>。この

ような仲間との相互交渉、交友関係において集団保育環境は積極的な影響を与えることは、一般的に認められることが多いが、しかし、Doyle, A. B.らのみが、その傾向を否定する結果を報告している<sup>36)</sup>。

なお、成人との相互作用については、保育児、家庭児の比較は多いが、結果は両極に分かれ見解が異なる。Wright, M. J.からのように、両者に相違はみられないという報告もある<sup>129)</sup>。成人との相互作用や人間関係は、母親との愛着など基本的関係の確立や親子関係の安定性がかかわっていることは、これまでに概観した点からも示唆される場所である。

以上のような研究の結果や見解をまとめるならば、Rutter, M.のつぎの言葉を引用するのが適当であるかもしれない。「保育を家庭養育よりも効果のないことだと結論づけることは誤りである。むしろ、たとえ過去において(マイナスの効果が)過大に誇張されていたとはいえ、保育が何の危険ももたらさないと確信することも誤りであろう。今必要なことは、保育と家庭養育との比較を超えた研究を行わなければならないことである<sup>96)</sup>」。

なお、本研究は昭和58年度厚生科学研究の一環として行ったものである。

#### 文 献

- 1) Ainsworth, M. D. "Patterns of attachment behavior, shown by the infant interaction with his mother" Merrill-Palmer Quarterly, 10, 1964
- 2) Ainsworth, M. D. et al "Attachment and exploratory behavior of one-year-olds in a strange situation" in Foss, B. M. (ed) "Determinants of infant behavior" Vol. 4; Methuen, 1969
- 3) Ainsworth, M. D. et al "Attachment, exploration and separation: Illustrated by the behavior of one-year-olds in a strange situation" Child Development, 41, 1970
- 4) Ainsworth, M. D. S. et al "Individual differences in strange situation behaviour of one-year-olds" in Schaffer, H. R. (ed) "The Origins of human social relations" Academic Press, 1971
- 5) Ainsworth, M. D. S. et al "Patterns of attachment" Erlbaum, 1978
- 6) アクスリナ, N. 伊集院俊隆訳「ソビエトの社会保育」新読書社, 1976
- 7) 網野武博他「乳幼児期における母性的養育環境の相

- 違と発達に関する縦断的研究1」日本総合愛育研究所紀要, 第15集, 1980
- 8) 網野武博「諸外国の保育」(岡田正章他(編)「保育研究の進歩」'80, '82) 医歯薬出版, 1980, 1982
  - 9) Anderson, C.W. "Attachment in daily separations: Reconceptualizing day care and maternal employment issues" *Child Development*, 51-1, 1980
  - 10) Anthony, E.J. et al (ed) "Parenthood: Its psychology and psychopathology" Little Brown, 1970
  - 11) Barahal, R.M. "A comparison of parent-infant attachment and interaction patterns in day care and non-day care family groups" *Dissemination Abstracts International*, 38, 1978
  - 12) Belsky, J. et al "The effects of day care: A critical review" *Child Development*, 49, 1978
  - 13) Belsky, J. et al "What does research teach us about day care: A follow-up report" *Children Today*, 8-4, 1979
  - 14) Blehar, M.C. et al "Anxious attachment and defensive reactions associated with day-care" *Child Development*, 45, 1974
  - 15) Blehar, M.C. "Mother-child interaction in day-care and home reared children" in Webb, R.A. (ed) "Social development in childhood-Day care programs and research" John Hopkins Univ. Press, 1977
  - 16) Bone, M. "Pre-school children and the need for day care" HMSO, 1977
  - 17) Bowlby, J. "Maternal care and mental health" WHO, 1951 (黒田実郎訳「乳幼児の精神衛生」岩崎学術出版, 1967)
  - 18) Bowlby, J. "The nature of the child's tie to mother" *International J. of Psychoanalysis*, 35, 1958
  - 19) Bowlby, J. "Attachment and loss, Vol. 1 Attachment, Vol. 2 Separation: Anxiety and anger" Hogarth Press, 1969-1973 (黒田実郎他訳「母子関係の理論」①, ②, ③, 岩崎学術出版, 1976~1981)
  - 20) Brazelton, T.B. "Infants and mothers: Differences in development" Delacorte Press, 1969
  - 21) Brazelton, T.B. "Toddlers and parents" Delacorte Press, 1974
  - 22) Brazelton, T.B. "Your toddler: When both parents work" Redbook, October, 1974
  - 23) Brazelton, T.B. "Working parents: Fifteen months" Redbook, February, 1975
  - 24) Bronfenbrenner, U. "Is early intervention effective" in "A report in "A report in longitudinal evaluations of preschool programs" DHEW, 1974
  - 25) Brookhart, J. et al "The effects of experimental context and experiential background on infants' behavior toward their mothers and a stranger" *Child Development*, 47, 1976
  - 26) Bryant, B. et al "Children and minders" Grant McIntyre, 1980
  - 27) Burchinal, L.G. "Relations among maternal employment indices and developmental characteristics of children" *Marriage and Family Living*, 23, 1961
  - 28) Caldwell, B.M. et al "Mother-child attachment patterns: comparisons between a group with early day care experience and a home-reared group" *American J. of Orthopsychiatry*, 39, 1969
  - 29) Caldwell, B.M. et al "Infant day care and attachment" *American J. of Orthopsychiatry*, 40, 1970
  - 30) CERI "Children and society: Issues for pre-school reforms" OECD, 1981
  - 31) Church, J. "Understanding your child from birth to three: A guide to your child's psychological development" Random House, 1973
  - 32) Cochran, M.M. "A comparison of group day and family child-rearing patterns in Sweden" *Child Development*, 48, 1977
  - 33) Cornelius, S.W. et al "Dependency in day-care and home-care children" *Developmental Psychology*, 11, 1975
  - 34) Crouter, A.C. "The children of working parents" *Children Today*, 11-4, 1982
  - 35) Cummings, F. "Caretaker stability and day care" *Developmental Psychology*, 16, 1980
  - 36) Doyle, A.B. "Infant development in day care" *Developmental Psychology*, 11, 1975
  - 37) Escalona, S.K. "Infant day care: A social and Psychological perspective on mental health implications" *Infant Mental J.*, 2, 1981

- 38) Etaugh, C. "Effects of maternal employment on children: A review of recent research." *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 20, 1974
- 39) Etaugh, C. "Effects of nonmaternal care on children: Research evidence and popular views" *American Psychologist*, 35-4, 1980
- 40) Farran, D.O. et al "Infant day care and attachment behaviors toward mothers and teachers" *Child Development*, 48, 1977
- 41) Fox, N. "Attachment of Kibbutz infants to mother and metaplet" *Child Development*, 48, 1977
- 42) Golden, M. et al "The New York City infant day care study" *Medical and Health Research Association of New York City*, 1978
- 43) Goodman, N. et al "Cognitive development of children in family and day care" *American J. of Orthopsychiatry*, 51, 1981
- 44) Gotts, E.E. "Long-term effects of a home-oriented preschool programs" *Childhood Education*, 56-4, 1980
- 45) Gruenberg, S.M. (ed) "The new encyclopedia of child care and guidance" *Doubleday*, 1968
- 46) Hatcher, B. "Half-day vs full-day kindergarten programs" *Childhood Education*, 57-1, 1980
- 47) Heinicke, C.M. et al "The organization of day care: Considerations relating to the mental health of child and family" *American J. of Orthopsychiatry*, 43-1, 1973
- 48) Hoffman, L.W. "Mother's enjoyment to work and effects on the child" in Nye, F.I. et al (ed) "The employed mother in America" *Rand McNally*, 1963
- 49) Hoffman, L.W. "Effects of maternal employment on the child: A review of the Research" *Developmental Psychology*, 10, 1974
- 50) Howell, M.C. "Employed mothers and their families" *Pediatrics*, 52, 1973
- 51) Howell, M.C. "Effects of maternal employment on the child" *Pediatrics*, 52, 1973
- 52) Howes, C. et al "Toddler peer behavior in two types of day care" *Infant Behavior and Development*, 4, 1981
- 53) Innes, R.B. et al "A comparison of the environments of day care centers and group day care homes for 3 year old" *J. of Applied Developmental Psychology*, 3, 1982
- 54) 石井房枝「母-子関係-アメリカ合衆国における1960年代から1970年代の母親の就労と乳幼児の発達に関する研究の変遷-」*暁学園短期大学紀要*, 9, 1976
- 55) 岩崎次男他(編)「世界の幼児教育 5 ドイツ」*日本らいぶらり*, 1983
- 56) 自治体問題研究所編「ソビエトの保育」*自治体研究社*, 1974
- 57) Kagan, J. et al "Infancy: Its place in human development" *Harvard Univ. Press*, 1978
- 58) 川野辺敏(編)「世界の幼児教育 3 ソビエト・東欧」*日本らいぶらり*, 1983
- 59) Kearsley, R.B. et al "Separation Protest in day care and home reared infants" *Pediatrics* 55, 1975
- 60) Kugelmass, N.I. "Wisdom with children" *John Day*, 1965
- 61) Lay, M.Z. et al "Effects of early day-care experiences on subsequent observed program behaviors" *Syracuse Univ.*, 1972
- 62) Ledesma, S. et al "Parent's perceptions of their infant's day care experience" *Infant Mental Health J.*, 1, 1980
- 63) Lippman, M.A. et al "Socio-emotional effects of day-care, Final project report" *Office of Child Development*, 1974
- 64) Maccoby, E.E. et al "Mother attachment and stranger reactions in the third year of life" *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 37-1, 1972
- 65) Macrae, J.W. et al "Are behavioral effects of infant day care programs specific?" *Developmental Psychology*, 12, 1976
- 66) Mayall, B. et al "Minder, mother and child" *London Univ. Press*, 1977
- 67) Moore, T.W. "Effects on the children" in Yudukin, S. et al (ed) "Working mothers and their children" *Michael Joseph*, 1963
- 68) Moore, T.W. "Children of full-time and part-time mothers" *International J. of Social Psychiatry*, Special Congress Issue 2, 1964
- 69) Moore, T.W. "Stress in normal childhood"

- Human Relations, 22, 1965
- 70) Moore, T.W. "Exclusive early mothering and its alternatives: The outcome of adolescence" *Scandicavian J. of Psychology*, 16, 1975
- 71) 守屋光雄「母親の就労と乳幼児保育—家庭保育と施設集団保育」*児童心理*, 34-14, 1980
- 72) Moskowitz, D.S. et al "Initiating day care at three years of age: Effects of attachment" *Child Development*, 48, 1977
- 73) National Day Care Home Study "Observation component, Final Report Vol. 3" SRI International, 1980
- 74) O'Connell, J.C. et al "Effects of day care experience on the use of intentional communicative behaviors in a sample of socioeconomically depressed infants" *Developmental Psychology*, 18, 1982
- 75) Portnoy, F.C. "Day care and attachment" *Child Development*, 49, 1978
- 76) Prescott, E.A. "Comparison of three types of day-care and nursery school/home care" *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 1973
- 77) Provence, S. "Infant day care: Relationships between theory and practice" in Zigler, E.F. et al (ed) "Day care: Scientific and Social Policy Issues" Arburn House Pub. Co., 1982
- 78) Provence, S. et al "The challenge of day care" Yale Univ. Press, 1977
- 79) Prugh, D.G. et al "Masked deprivations in infants and young children" WHO, 1953
- 80) Ragozin, A.S. "Attachment behavior of young children in day care" *Dissertation Abstracts International*, 37, 1977
- 81) Ramey, C.T. et al "Social and intellectual consequences of day care for high-risk infants" in Webb, R. "Social development in childhood: Day care programs and research" John Hopkins Univ. Press, 1977
- 82) Raph, J.B. et al "The influence of nursery school on social interactions" *American J. of Orthopsychiatry*, 38, 1968
- 83) Raven, M. "Review: The effects of child mind-ing: How much we do know?" *Child Care Health and Development*, 7, 1981
- 84) Ricciuti, H.N. "Fear and the development of social attachments in the first year of life" in Lewis, M. et al "The origin of human behavior: Fear" Wiley, 1974
- 85) Ricciuti, H.N. et al "Development of attachment to caregivers in an infant nursery during the first year of life" *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 1973
- 86) Robertiello, R.C. "Hold them very close: Then let them go" Dial Press, 1975
- 87) Robinson, H.B. et al "Longitudinal development of very young children in a comprehensive day care program: The first two years" *Child development*, 42, 1971
- 88) Roopnarine, J.L. et al "The effects of day care on attachment and exploratory behavior in a strange situation" *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development* 24, 1978
- 89) Rubenstein, J.L. et al "Care giving and infant behavior in two natural environments" American Psychological Association, 1976
- 90) Rubenstein, J.L. et al "Caring and infant behavior in day care and in home" *Developmental Psychology*, 15, 1979
- 91) Rubenstein, J.L. "A two-year follow-up of infants in community-based day care" *J. of Child Psychology and Psychiatry*, 22-3, 1981
- 92) Rutter, M. "Parent child separation: Psychological effects on the children" *J. of Child Psychology and Psychiatry*, 12, 1971
- 93) Rutter, M. "Maternal deprivation reassessed" Penguin, 1972 (北見芳雄他訳「母親剥奪理論の功罪—マターナル・デプリベーションの再検討」誠信書房, 1979)
- 94) Rutter, M. "Separation experiences: A new look at an old topic" *The J. of Pediatrics*, 95-1, 1979
- 95) Rutter, M. "Maternal deprivation, 1972-1978: New findings, new concepts, new approaches" *Child Development*, 50, 1979
- 96) Rutter, M. "Social-emotional consequences of day care for pre-school children" *American J. of Orthopsychiatry*, 51-1, 1981 and in Zigler, E.F. et al (ed) "Day care: Scientific and social policy issues" Arburn House Pub. Co., 1982

- 97) Sale, J.S. "Family day care: One alternative in the delivery of developmental services in early childhood". *American J. of Orthopsychiatry*, 43-1, 1973
- 98) Salk, L. "What every child would like his parents to know". David McKay, 1972 (野田雅子訳「リー・ソーク博士の育児書」TBS出版, 1978)
- 99) Salk, L. "Preparing for parenthood". David McKay, 1974
- 100) Saunders, M.H. "Some aspects of the effects of day care on infants' emotional and personality development". *Dissertation Abstracts International*, 33, 1972
- 101) Schwarz, J.C. et al. "Effects of early day care experience on adjustment to a new environment". *American J. of Orthopsychiatry*, 43-3, 1973
- 102) Schwarz, J.C. et al. "Infant day care: Behavioral effects at preschool age". *Developmental Psychology*, 10, 1974
- 103) Schwartz, P. "Length of day-care attendance and attachment behavior in eighteen-month-old infants". *Child Development*, 54, 1983
- 104) Smith, R. "Woman in the labour force in 1990". Urban Institute, 1979
- 105) Socialdepartementet "Daghem och förskolor". Sweden Socialdepartementet, 1951
- 106) Spelke, E. et al. "Father interaction and separation protest". *Developmental Psychology*, 9, 1973
- 107) Spock, B.J. "Baby and child care (1st ed)". Simon and Schuster, 1946
- 108) Spock, B.J. "Baby and child care (2nd ed)". Simon and Schuster, 1967 (高津忠夫(監)「スポック博士の育児書」暮しの手帖社, 1975)
- 109) Spock, B.J. "Raising children in a difficult time". Norton, 1974
- 110) Spock, B.J. "Baby and child care (3rd ed)". Pocket books, 1976
- 111) Stoltz, L.M. "Effects of maternal employment on children: Evidence from research". *Child Development*, 31, 1960
- 112) 鈴木佐喜子「母子関係論と保育理論(1)母子関係論についてのM・ラターの見解」*保育の研究* 4, 1983
- 113) Tizard, J. et al. "All our children: Preschool services in a changing society". Maurice Temple Smith Ltd., 1976
- 114) Tizard, B. et al. "Involving parents in nursery and infants school". Grant McIntyre, 1981
- 115) US Department Children's Bureau. "Infant care (1st ed)". US Government Printing Office, 1963
- 116) US Department Children's Bureau. "Infant care (2nd ed)". US Government Printing Office, 1973
- 117) US Department of Health, Education and Welfare. "Children at the center: Summary findings and policy implications of the national day care study". DHEW, 1979
- 118) van der Eyken, W. "The pre-school years". Penguin, 1977
- 119) Vaughn, B.E. et al. "The relationships between out-of-home care and the quality of infant-mother attachment in an economically disadvantaged population". *Child Development*, 51, 1981
- 120) Vliestra, A.G. "Full-versus half-day preschool attendance: Effects in young children as assessed by teacher ratings and behavioral observations". *Child Development*, 52, 1981
- 121) Walltson, B. "The effects of maternal employment on children". *J. of Child Psychology and Psychiatry*, 14, 1973
- 122) Wandersman, L.P. "Ecological relationships in family day care". *Child Care Quarterly*, 10, 1981
- 123) Webb, R.A. (ed) "Social development in childhood-Day care programs and research". John Hopkins Univ. Press, 1977
- 124) Weisberger, E. "Your young child and you". Dutton, 1975
- 125) Weiser, M.G. et al. "Group care and education of infants and toddlers". C.V. Mosby Company, 1982
- 126) White, B.L. "The first three years of life". Prentice-Hall, 1975
- 127) Whitebook, M. et al. "Who's minding the child care workers?" "A look at staff burn out". *Children Today*, 10-1, 1981
- 128) Wilcox, B.M. et al. "A comparison of individual with multiple assignment of care givers

- to infants in day care" Merrill-Palmer Quarterly, 26, 1980
- 129) Wright, M.J. "Changes in the social competence of Canadian preschool and day nursery children of low and high socioeconomic status" Interchange, 6, 1975
- 130) Yarrow, M.R. "Maternal employment and childrearing" Children, 8, 1961
- 131) Yarrow, M.R. et al "Child rearing in families of working and non-working mothers" Sociometry, 25, 1962
- 132) Yarrow, L.J. "Maternal deprivation: Toward an empirical and conceptual re-evaluation" Psychological Bulletin, 58, 1961
- 133) Yudkin, S. et al "Working mothers and their children" Micael Joseph, 1963
- 134) Zigler, E.D. et al (ed) "Day care: Scientific and social policies issues" Arburn House Publishing Company, 1982

## Longitudinal Study on Difference in Maternal Care Environment and Development in Early Infancy (6)

### — Effects of Separation and Day Care in Early Infancy

Takehiro AMINO

This is the 6th report of the study which includes the bibliographic and corroborating research concerning the effects of separation and/or deprivation experience in early infancy exerted on the later development of infants.

Since the 5th report, the study has been focused on the day care experience of infants, as one of the daily separation experiences from their mothers. In this report, various trends of day care in developed European and American countries were analysed, and some effects of working mothers, early infant day care and the modes of day care—family day care, group day care—exerted on child development were considered. Those were as follows:

1. A controversy has been continued for such a long time whether mothers should care their children for themselves in their own homes or women should work out of their homes and children should be encouraged to be cared at day nurseries.

Until now, however, no decisive argument has been found. We should rather consider that the importance of maternal or parental care environment as well as day care environment must be emphasized regardless of mothers working or not.

2. We can not argue within only a simple factor about the effects of separation experiences and day care experiences. In either case, it is necessary to think about such kinds of factors mentioned below:
  - (1) the age of the first day care experience
  - (2) the duration of day care
  - (3) the day care environment, above all, its stability
  - (4) the responsibility and attitude of parents
3. The validity of day care in early infancy is the most confronted argument. With respect to this problem, we require further investigation as pointed below:
  - (1) Whether day care lames the establishment of attachment between mother and her infant.
  - (2) What plus and/or minus effect of day care in early infancy exerts on later development.